

## コミュニケーションにおける観察 —— 言語過程説からシステム理論へ ——

野村 真木夫\*  
(平成9年4月30日受理)

### 要 旨

時枝誠記の言語過程説にみえる「伝達」・「機能」・「観察」の範疇と概念規定を批判的に検討することをつうじて、これらの範疇をシステム理論の枠組みにおいて再構成することを目的とする。日常会話を分析例としてもちい、以下の議論を展開する。時枝のいう「伝達」については、テキストを提示するトランスミッションと、意味の産出過程を内在するコミュニケーションの両範疇を分離する必要がある。時枝の理論は、「機能」の規定において、経験的妥当性、一意性、決定可能性に抵触している。機能の範疇はテキストやコミュニケーションの構成要素の記述概念として限定すべきである。時枝は「観察」の範疇をコミュニケーションの外側に限定していたが、これをその内側においてとらえ、コミュニケーションの参加者と観察者とを、そのシステムにおいて相互に関係しあうものと認める。

### KEY WORDS

テキスト	Teksto	観察	Observeo
機能	Funkcio	コミュニケーション	Komunikado
システム	Sistemo	組織化	Organizado

### 0. はじめに

人のおこなう言語活動において、あるまとまりをもった表現の具体相をテキストとよぶ。テキストは、話し言葉であるか書き言葉であるかを問わず、コミュニケーションに即して具体化され、観察される。コミュニケーションにおいて、テキストの送り手と受け手とは相互にかかわりあい、能動的に表現に言及するのであり、受け手は自身の環境や知識をたよりに、その表現から新たに意味をつくりだす。そのような観点からテキストのまとまりかたや関係性、類型性をとりだそうとすると、テキストの構造を記述するだけでなく、テキストの任意の要素の相互的な、あるいはコミュニケーションにおける機能が問われなければならない、またコミュニケーションの参加者がテキストを認知する過程にも注意をはらうことがもとめられる<sup>1)</sup>。これは、コミュニケーションを、その構成要素の相互に関係するシステムと解釈し、そのなかにテキストを位置づける立場を要請する<sup>2)</sup>。

本稿は、時枝誠記の提案した言語過程説を視座としながら、コミュニケーションをシステムとみなす立場への展開をしめすなかで、会話における修正、説明、物語のもたらす言語現象を

\* 言語系教育講座

具体例として、そのような理論的な方向性の内在する問題点の整理をこころみる。

## 1. テキストにおける機能の仮定とコミュニケーション

テキストを形式的に記述しようとする研究領域を「テキスト文法」とよぶとき、おおよそ次のような共通理解が、そこに成立している。

- (1) テキスト文法は現代の言語学で扱われる多くの諸問題の記述に適切なフレームワークを準備してくれるだろう。そのうえ、言語的コミュニケーションの過程に現われる、あらゆるタイプのテキストの研究のための明示的な基礎を与えるものでなければならない。(van Dijk, T. A. 1972: 1)

ここにいう言語的コミュニケーションの過程に言及したテキストの研究の一例として時枝誠記の仕事がある。時枝のいわゆる「言語過程説」は、(2)の仮説に集約される。

- (2) 言語過程説は、言語を、人間行為の一として観察し、すべてを、言語主体の機能に還元しようとする学説である。(時枝1955: 5)

(2)の「言語主体の機能」は、(3)にみるように「伝達」の問題にくみこまれる。

- (3) 話手の思想が聞手に伝達されて、ここに始めて、言語の機能が発揮されるのである。(同: 27)

また(2)の「観察」は、(4)のように「観察者」の概念をみちびきだす。

- (4) 言語の観察は、常に観察者自身の言語経験の内省観察の上に成立する。第三者の言語行為については、一旦これを、観察者の経験として、再構成されることが必要である。(同: 16)

時枝のテキスト研究そのものは、時枝(1960)でしめされるが、本節ではその理論的な基礎として、言語の「伝達」、「機能」、「観察」および「観察者」の範疇を批判的に検討する。

### 1.1 言語過程説における「伝達」と「機能」

テキストの送り手と受け手のあいだで、テキストから意味を産出する過程をコミュニケーションとよぶならば、時枝の「伝達」と「機能」という用語は、このコミュニケーションとその関連する範疇において規定しなおす必要がある。時枝の「伝達」の範疇では、テキストを提示することと、その意味を産出することとを判然とさせておらず、「機能」の範疇は、言語現象を記述するモデルとしての要件をみだしていない。

まず、時枝の「伝達」の範疇を検討しよう。時枝は、端的に「言語の機能が、伝達にある」(1955: 62)という。これはすなわち言語過程説の本質にふれるべきことのいいであるが、「伝達」は(5)のように規定されている。

- (5) 伝達は、表現の媒材である音声、文字を通して、聞手にある思想を喚起させることにおいて、すべて一様に伝達といふことが出来るのであるが、その中に、イ、正しい理解(正解)、ロ、誤つた理解(誤解)、ハ、歪めた理解(曲解)が区別される。(同: 51)

この規定のまえに時枝は「伝達の成立」に言及し、(6)(7)のようにのべている。

- (6) 伝達の成立を困難にする更に一つの理由は、言語は、表現の素材である個物を、個物として表現するものではなく、常に、個物を概念的認識を通して、これを一般化して表

現するものであるといふことである。(同：31)

- (7) 伝達は、音声文字を媒材として、聞手に概念を喚起させることによつて成立するのであるが、聞手が喚起する概念も、聞手の経歴や体験によつて左右されるといふことになれば、正しい伝達が成立するといふことは、極めて困難なことになるのは当然である。

(同：37)

時枝は、(5)のように「聞手」に即して「伝達」を認識し、かつ、伝達される「思想」は「聞手」が「主体的な連合作用によつて……自ら形成したものに他ならない」(同：28)ことを明らかにしているにもかかわらず、「正しい理解とは、聞手において、話手とは、同様な概念が喚起された場合である」(同：51)と主張しており、規範的なあるいは理想的な伝達様式が念頭にあったものと解釈される。これは(6)にみるような、固定的なコードの概念を念頭においていることから、うらづけることができる。つまり、時枝は「伝達の成立」を情報の要素の1対1の写像的な様式においている。このために、伝達における「聞手」のありように注目しているにもかかわらず、「聞手」が独立に意味を産出するという、非対称的なかわりかたを肯定的にとらえることができなかつたのである。このため、(7)にあげる現象をくみこんだ、経験的な科学の成立がはばまれることになる。

このように時枝のかんがえた原因は、彼の「伝達」の概念規定に内在する。すなわち、時枝は、「伝達」を直線的で単層的な過程としてとらえていたのである。直線的であるというのは、「表現より理解への流れを、一般に伝達と呼んでいる」(時枝1956：192)という文言に代表されるように、「伝達」の「表現者」と「理解者」とをむすびつける過程としてとらえ、それゆえに「話手は、聞手に分つてもらはうと思ひ、聞手は、話手を分らうとする意志がある」(同：194)とみなしたことをいう。また、単層的であるというのは、音声・文字が「受渡される」ことと、「思想」が「受渡される」ことを区別して(時枝1955：28f)、したがって「表現過程と理解過程」とを別個にとらえている(時枝1955：57ff, 1956：194ff)にもかかわらず<sup>3)</sup>、「話手」と「聞手」あるいは「表現者」と「理解者」とが意味を独立に産出しうることを積極的に評価しなかつた、ということである。「曲解」の説明には、このことがとりあげられているのだが、むしろ「伝達が完全に成立する」(時枝1955：59)ことを眼目にしていたのである。

以上のことは、時枝が「伝達」の概念について、音声・文字のトランスミッションとテキストの送り手と受け手のあいだのコミュニケーションという概念を一体化していたことによる<sup>4)</sup>。ここで、トランスミッションとは、なんらかのテキストの提示が認知された時点で成立し、これが理解されたりあるいはその効果が観察されたりする段階をふくまない。また、コミュニケーションは個人の行為に還元されるものではなく、テキストからなんらかの意味が選択され、その選択の結果が観察されるという、意味の産出過程を内在するシステムとして定義される。時枝が「正しい理解」といい、また(6)のような主張をおこなうときそこにはトランスミッションの概念があり、(7)のような伝達のありようを認識するときにはコミュニケーションの概念があつたのであり、これがふたつながら「伝達」という用語に集約されていたわけである。

つぎに、(3)にみたように、時枝によれば「伝達」によって喚起されるという「機能」の範疇を検討しよう。時枝(1955：72)は「言語行為と、それによつて展開する行為との関係を、言語の機能的関係」といい、言語の機能としてつぎの3つをあげる(同：74-94)。

- (8) 実用的(手段的)機能：言語が他の生活の手段として行為されるといふこと  
 社会的機能：人間相互の感情の融和親睦を成就する

鑑賞的機能：表現それ自体が、好悪の感情の対象となる

(8)の3機能のうち、「実用的(手段的)機能」については、「言語の最も根本的な機能である」(同:74)といい、他の機能とのあいだに質的な差をみとめている<sup>5)</sup>。さらに時枝(1956:217f)では、「共感的機能」がこの3つにつけくわえられ、(9)のように規定されている。ただし、列挙の順は「実用的機能」について2番目であり、しかも、実用的機能との差異が明確になっておらず、むしろそれと連続的に仮定したものと解釈できる。また、具体的な表現との関連が明示されていない。

(9) 共感的機能：聞手を同調者の立場に置かうとする表現

時枝(1955)では、ほかに「対人的機能」(156)と「社会的機能」(157, 165ff)とをあげる。「言語の社会的機能を、対人関係を構成する機能にあると見た場合」(170)のような文言から、この2機能は同一だとみなしてよい。この「社会的機能」は、(10)にみるように、(8)および(9)の機能とは別格のあつかいになっている。

(10) 言語の社会的機能の問題は、一方、文法論に関係を持ち、他方、伝達論に連なり、そして、言語と生活との交渉を明らかにするための最も基礎的な部門であるといふことが云へるのである。(時枝 1955:186)

このようなあつかいかたは、時枝(1956)でも同様であり、時枝(1955)では明示的でなかった「社会的機能」の定義が、次のように記されている。

(11) 人間関係だけを構成する機能を、言語の社会的機能と名づける(1956:215)

言語の機能である以上、それらは、たとえば日本語の、何らかの要素に関係づけられている必要がある。しかしながら、時枝(1955,1956)によれば、社会的機能は、「助詞、助動詞、感動詞、その他の文法形式」すなわち時枝のいわゆる「辞」に属する語の一部によることが、あいまいながら、規定されているもの(時枝 1955:172ff,1956:215)、他の4機能については明示性を欠く。実用的機能の例として、文・文学作品・和歌の贈答が、共感的機能には「話し」・文学作品が、社交的機能にはあいさつ・贈答歌・連歌や俳諧の興行が、それぞれあげられており、鑑賞的機能については「以上の諸機能とからみあつて存在する」(1956:218)として特定の要素や単位体とむすびつけることをさけている。このような規定のしかたでは、任意の言語現象にあらわれた複数の機能の関係を記述しようとするとき、それが有限の手続きで終了しなくなる可能性が生じる。すなわち、機能の定義が、決定不可能性をすでに内在させていたのである。

さて、その著作をつうじて、時枝は言語の機能として5つを提案したのであるが<sup>6)</sup>、これをようするに、一定の文法形式に即して定義される社会的機能を基礎として、そのうえに、「言語行為」にひろくかわりをもちうる実用的機能を優位にたて、以下、共感的・社交的・鑑賞的機能を列挙するモデルが規定されたわけである。

時枝のこの機能のモデルには、少なくともつぎの3つの不都合がある<sup>7)</sup>。

- (12) a 機能が網羅的であることが保証されていない
- b 機能が一意的に定義されていない
- c 機能の相互関係と整合性が明示されていない

(12) a は、時枝(1951)に(8)の3機能をあげながら「なほ、これ以上のものが挙げられるかも分からないのであるが」と留保している点、また「社会的機能」や「共感的機能」のあつかいかたが安定していないことにおいて問われる。いわゆる経験的妥当性が保証されないのである。

bは、言語表現にかかわる要素との対応関係のあいまいさによる。この状態では、具体的なテキストあるいはその要素を定義域とする、それぞれの機能のラベルを、関数的に導出することができない。cは、鑑賞的機能のあつかいにかかわる決定不可能性、ならびに、社会的機能や実用的機能が基礎的、あるいは根本的だという、その論証がじゅうぶんになされていないことによる。社会的機能は、(10)や「辞」にかかわることに着目するならば、第一義には意味論の水準であるし、他の4機能は言語運用の水準に帰属する。このような関係がみきわめられていなかったのである<sup>8)</sup>。

(12) a b c 3つの不都合さは、それぞれ、経験的妥当性、一意性、決定可能性への抵触として集約できる。これはようするに、複数の機能を設定し、そこに階層性をみとめた理論そのものの内在する方法論的な困難さに由来する。そもそも、時枝の発想は、言語に認められる種々の現象を記述するためのシステムとして、整合性のたかいモデルを構築する認識が希薄であった可能性がたかい。

時枝による機能の考察は、このように不完全であったものの、「言語の機能が、伝達にある」(時枝1955: 62)という文言の意義をあらためて検討すると、時枝はコミュニケーションの範疇を「機能」の範疇においてとらえようとしていたことが理解できる。すなわち、(6)(7)の引用で確認したように、時枝が指摘した「伝達」の成立の困難さは、その一般化しえない局面に起因するといふのであったが、この問題は、時枝がとりあげた「機能」の領域においてこそ、決着をはかられるべきものであった。

(13) 話手と聞手との間に、伝達が成立するといふことは、話手と聞手との間に機能的関係が存在することを意味する。(時枝1956: 213)

この文言はすでに指摘したように、「伝達」という範疇がトランスミッションとコミュニケーションとに分離されるのであれば、その違いを判然とさせないまま、両者に言及していたものと解釈できるのである<sup>9)</sup>。

## 1.2 言語過程説における「観察」と「観察者」

前節のような認識にたちながら、時枝のとりあげた「観察」と「観察者」の範疇の検討にうつろう。時枝は、この2つの範疇を提示したにもかかわらず、それを彼のいわゆる「言語過程」のなかに判然と位置づけることをおこなっていない。それゆえ(2)にあげた言語過程説の定義においても「観察」の語がみえるものの、「伝達」や「機能」の範疇とこれをむすびつけるにいたらなかった。コミュニケーションという範疇をとりあげるのであれば、あらためて時枝のいう「観察」と「観察者」の両範疇を理論化する必要がある。

この範疇については、時枝(1941)のつぎの命題を批判的に検討することが重要である<sup>10)</sup>。

(14) 観察的立場は、常に主体的立場を前提することによつてのみ可能とされる。(1941: 29)  
この2つの立場は、つぎのように範疇化される(1941: 23)。

(15) 言語に対する立場 { 一、主体的立場——理解、表現、鑑賞、価値判断  
二、観察的立場——観察、分析、記述

「観察的立場」とはすなわち「言語を専ら研究対象として把握」する立場とされているが(1941: 22)、このことと(14)の命題とのかかわりかたが問題になる。時枝はこの2つを差異化するとき、自己観察の範疇を考慮していない。このことは(16)(17)の文言から理解できる。すなわち、2つの立場は、単に概念として差異化されているだけでなく、言語活動への参加者が

任意に観察的立場をとりうることまでが排除されている。いいかえれば、観察者とは研究者に局限されており、この逆の関係がみとめられていないのである。

(16) 自己の言語を対象として研究する場合は、自己は言語の主体であると同時に、又観察者である。(1941:23-24)

(17) 解釈によつて再構成されたものは、どこまでも、観察者の主体的活動であつて、話手の行為そのものであるとは云ふことが出来ない。しかしながら、第三者の言語行為の観察は、このやうにして、再構成されたものについて行ふより他に方法がないのである。(1955:15)

しかし、この2つの立場がコミュニケーションの参加者において共起することは、たとえばつぎの修正に関する例から理解できよう<sup>11)</sup>。

- (18) 1A きつとー、参観日とかだからねー、  
 2B んー。  
 3A 考えてきたんだろーなーとは思ったけど。  
 4B へー。  
 5A すらすらすらすらと// {笑い},  
 6B {笑い}  
 7B すごいねー。  
 8A //んー。  
 9B 子供みたい、子供じゃないみたいだねー。
- (19) 1C どこの高校生だろーねー、東京だでー、まー近い//ところ、  
 2D だでー。  
 3C あ、東京だからー、{笑い} だからそのへんのねー、
- (20) 1D ゼミのときもゆってたよね。  
 2C はー。  
 3D (きゅーり)//あれ、ゼミのときじゃないっけ、いつだっけ。  
 4C あれ、ゼミのときだったっけ。  
 5C ちがうよあの医療講習のときだよ。  
 6D あ、医療講習か。

(18)9B はB自身の自己主導による自己修正、(19)はDによる修正誘発をうけた他者主導だがCが「だで」を「だから」におきかえた自己修正の例であり<sup>12)</sup>、参加者が自身の発話をその一連の発話中あるいは発話の終了直後に、観察することに依存している。(20)は1Dの発話にたいし、D自身が3Dで修正を誘発しているが(自己主導)、同時に4Cも修正を誘発している(他者主導)。これをうけた5Cで、他者修正がおこなわれ、6Dがこれを確認している。

自己主導で自己修正をおこなう会話の参加者は、時枝の用語を採用するならば、「主体的立場」で発話を運用していながら、「観察的立場」を介在させることでこれに修正をくわえている、ということになる。他者主導および他者修正のばあいも、相手の発話にたいする修正を誘発したり、その一部を修正するとき、先行するテキストの観察が明らかに介在している。このかぎり、時枝の(14)の命題に違反はないかのようであるが、しかし、時枝は(16)(17)のように主張しており、言語活動の参加者が自省によって観察者になりうることをみとめていない。ここに時枝の用語と概念規定の不備がうきばりにされるのである。

このような、会話における修正の表現は、コミュニケーションの参加者の相互作用による言語の創造的な側面を、ミニマムな例ではありながら、しめすものといえる。発話の修正にかかわる自己主導の例は、コミュニケーションの参加者が、時枝のいわゆる「主体的立場」であるだけでなく、同時に、テキストに言及する「観察者」でもあること、いいかえれば、一人の参加者において参加者と観察者のふたつの属性が常に共起していることを明示する。

自己主導の自己修正は、会話の参加者が、任意の発話において、その近傍の先行発話に、反省をくわえながら言及することである。これは「主体的立場」において発話したテキストに、なんらかの弁別化の操作をくわえたことを意味する。すなわち、言語運用上の反省をへながら、発話の構成素の意味論的な選択をおこなう過程が、修正としてテキストに具体化されているわけである。他者主導の自己修正においても、先行するテキストに言及することにおいて、同様である。こういった、操作をくわえる人をわれわれは観察者<sup>13)</sup>とよぶのであって、時枝のようにそれを研究者に局限したり、観察の対象を「第三者の言語行為」のみに認めることはできないのである。

時枝の(14)の命題は、(21)の文言とも整合しているが、上記の文脈から同様に批判される。

- (21) 言語は、その本質において、人間の行為の一形式であり、人間活動の一であるとする時、何よりも肝要なことは、言語を、人間的事実の中において、人間的事実との関連において、これを観察するといふことである。(1955: 6)

ここにおいて、観察という範疇がすでに人間の、すなわちコミュニケーションの参加者の、一次的ないとなみであることが、時枝には正確に認知されていない。このため自己観察や言語活動の参加者による自省が認知されにくいこととなっていた。「言語の観察は、常に観察者自身の言語経験の内省観察の上に成立する」(時枝1955: 16)という認識が、「主体的立場」にまで拡張されるにいたらなかったのである。観察の範疇がコミュニケーションのシステムの環境のわがに、つまりシステムの外側においやられたままなのである。このため時枝は、観察の観察<sup>14)</sup>、という回帰的な現象を、その直前にまで達しながらも発見せずにおわたたのである。

本節では時枝誠記の言語過程説における「伝達」「機能」「観察」「観察者」という諸範疇を批判的に検討してきた。ここでえた所見はつぎのようであった。

- (22) a 「伝達」の範疇は、テキストの提示としてのトランスミッションと意味の産出過程を内在するコミュニケーションの概念とが混在している。  
 b 「機能」に複数の範疇を規定し、それらに不用意な階層性を認めたため、機能相互の整合性や補完性が保証されていない。  
 c 「観察」の範疇が言語を研究対象として把握する立場に限定され、言語活動の参加者が「観察者」になることが認知されず、したがって観察の観察という現象もみおとされている。

## 2. コミュニケーションにおける観察と観察者

本節では、以上の議論をふまえつつ、あらためて、観察と観察者の範疇を検討しなおそう。本稿の筆者は時枝の(14)の命題をいかしつつ、観察者を、いいかえれば観察という営為をシステムとしてのコミュニケーションの内側に位置づけようとする。これは、さらにいいかえれば、

コミュニケーションの参加者と観察者を同列のネットワークにくみ入れることであり、この全体の枠組みにおいてテキストをとらえることである。

コミュニケーションにおける観察とは、ようするに、表現の具体相としてのテキストの任意の構成素に言及することである。これは観察者が意味の産出にかかわるということであり、コミュニケーションを言語運用において描写することは意味しない。というよりも、言語運用の議論を経由した、コミュニケーションのシステムにおいて、テキストがどのように組織化されているのかを問うことを意味する<sup>15)</sup>。ここで、組織化とは、テキストの構成要素、あるいは参加者の相互作用や関係性をさしている。

このようばあい、コミュニケーションの過程において参加者の知識の差異が顕現しているとき、参加者は、コミュニケーションがその差異を解消させる方向性のものであるのか、逆に増幅をはかる方向性のものであるのか、について自省をすることができる<sup>16)</sup>。この自省によって、参加者が観察者の機能をになうことは、前節でとりあげたが、ここでは参加者の知識の差異の顕現相についてかんがえ、観察を観察することをコミュニケーションのシステムのなかに位置づける。つぎの例をみよう。

- (23) 1C あーー、ハンバーグかー、Kちゃんよくハンバーグ作ってるよなー。  
 2D んー冷凍したのでねー//んー。  
 3C   ねー。ずくはーあるよね。  
 4D //ずくがある。  
 5C     あたし、  
 6C んー、いーわからなくて// {笑い}。  
 7D   {笑い} 教えてよ。  
 8C これ以上にいーよーがない。んーとー、  
 9D ずくないとかゆーよねー。  
 10C んー。  
 11D ずくないってなに。  
 12C ずくなし。  
 13D わからない。  
 14C なんてー説明したらいーのかねわからないんだなー、これはー。  
 15C   (2.5) 心からこー {呼気} ふき//だす感情がー、ある。  
 16D   心からね、心から。  
 17C ずくない。  
 18D   (1) んー、//わかんない。  
 19C   無精ってこと。  
 20D んー？

この例は、Cの発話にある「ずく」をめぐる談話が中心である。4D・7Dがこの語にたいする、説明の要求であるが<sup>17)</sup>、この発話以降、3Cまでの「Kちゃん」を話題とする談話から話題が転換され、発話の構成要素に言及する談話に移行している。この言及がCには方言意識の自省を要求し、Dには発話の理解に言及することにおいて、それぞれ意味を産出することをもとめる。

まず、Cの自省であるが、「ずく」を共通語と認知していないことは、6Cで表明されている<sup>18)</sup>。



6Cは、俚言「ずく」が、母方言を異にするDによってどのように観察されているかを観察した結果、Cのくだした判断を情報提供した発話である。Dの説明要求により、CとDの「ずく」に関する知識の差の解消がもためられているにもかかわらず、Cは17Cまで、差の増幅はこころみないまでも、すくなくとも、その解消をはかる発話をおこなっていない。これは、ただ説明を留保しているのではなく、8C・14C・15Cは、説明可能かいなかについて、自己観察をおこなっていることの情報提供である。19Cが、Cによる「ずくなし」の意味の産出である。

つぎに、Dによる発話理解への言及をとりあげる。Dは、9D・11Dで、すでに獲得している「ずく」に関する知識に言及しながら、説明要求をおこない、16Dでは15Cによって獲得した情報から意味の産出をこころみている。13D、18Dは、Dの説明要求が発話の相互作用によって説明の理解に到達したかどうか、つまりCの発話がもたらした意味の産出に言及する発話である。これはコミュニケーションの参加者であるDが、コミュニケーションのそれぞれの局面を観察したことによっており、説明要求としての機能が、13D・18Dにもわりあてられるのである。

ここで重要なことは、コミュニケーションの参加者が観察者でもあるという、そのありようである。参加者が相互につくりだしているテキストが、そのコミュニケーションのなかで、どのように観察されているかを観察することによって、意味が産出されるのである。したがって、観察者という範疇は、時枝のもちいたそのように、研究者の立場におきかえうるものではない。

(23)において、会話の当事者として、参加者であり、また観察者であるのは、C・Dの2名であるが、テキストの環境に属する観察者を、想定することができる。時枝のいわゆる観察的立場とは、この観察者のみをさしている。テキストの環境に属する観察者は、彼が観察者であるというその関係性において、C・Dと同様に意味の産出をおこなっており、このことにおいて(23)のコミュニケーションに関与しない傍観者ではありえない。つまり、コミュニケーションの参加者なのである。

時枝のような「言語に対する立場」を「主体的立場」と「観察的立場」との対立でとらえるかんがえかたは、コミュニケーションの「参加者」と「観察者」という範疇の関係性におきかえられなければならない。これは単に用語をさしかえることではない。

すでにのべたように、参加者はコミュニケーションの成立において規定され、参加者がコミュニケーションの具体相としてのテキストに言及するとき、かれは観察者として規定される。逆に、会話の当事者ではない観察者についても、その観察者が意味の産出をおこなうとき、これをコミュニケーションの参加者とみなすことになる。したがって、時枝のいう意味での「主体的立場」と「観察的立場」とは、ともに、本稿のいう意味でのコミュニケーションの参加者と観察者の属性をになうことになる。ただし、時枝の「主体的立場」と「観察的立場」とは、そこにあらかじめ一定の方向性を内在するものとして定義されており、相互に関係する範疇とはみなされていない。これにたいし、本稿では、参加者と観察者の範疇を、相互に関係しあうものとして導入しており、この意味において、両者はシステムを形成しているのである。

本節ではつぎのことがらを確認した。

- (24) a コミュニケーションの参加者は、テキストに言及することでその観察者となり、テキストから意味を産出する。
- b aの観察者が産出したテキストに言及することで、別の任意の参加者は回帰的に観察をおこなう。

- c 参加者と観察者とはともに意味を産出し、相互に関係しあうことでシステムを形成している。

### 3. システム理論への展開

参加者と観察者の関係しあうコミュニケーションにおいて、テキストはどのような過程をへて組織化されていくのか。このことが、(24)cのように規定することの有効性をさぐる観点となる。つぎの例によって検討しよう。

- (25) 1C でも夕顔のあんかけにはちよとわるい思い出があつてねー。  
 2D なにー？  
 3C 去年の夏にあたしが帰つてー、  
 4D んー。  
 5C (1.5) 是非、あん、せ、成長した料理の腕を見せてあげたいと思って親に、  
 6D んー。  
 7C 夕顔のあんかけを作つたんだよ大鍋にいっぱい。  
 8C 大成功だつたんだよ作つたときは、  
 9D んん。  
 10C こー、かたくりこの量もちよーどよくて、でもはこ運んでくる間に、落として、//  
 こーぼれて、いまだに帰るとこー、戸棚のところに、あんかけのべたつとついで、  
 あーまだついでる。  
 11D {笑い}  
 12C それは帰ってくる日の、  
 13D んー。  
 14C 夕飯、最後の晩餐、  
 15D んー。  
 16C だつたのにー、//わたしのあんかけをー、も一床に//しみこましてしまったの。  
 17D Cらしーねー。  
 18D そいで、それは全部だめになつたの？  
 19C 半分。  
 20D (1.5) 親ーたいへん//だつたでしょー。  
 21C 親は悲しーやら嬉しーやらだよねー？  
 22D んー。  
 23C せっかく作つたのにな？  
 24D んー、そっちもたいへんだよね。  
 25C んー、楽しー思い出のはずだつたのに。

(25)はCの実生活の経験の物語が中心であり<sup>19)</sup>、状況設定、主要なトピック、そのトピックの展開が16Cまでに報告されている。この間、Dは2Dで情報要求をおこなうほかあいづちをはさむだけであり、実質的な発話はひかえている。18D-19Cは物語の意味を補完するための情報要求と、これにたいする情報提供である。20D以下はこの物語の結果と評価に関する発話連続であ

る。

さて、(25)では、発話の概念内容にかかわる観念構成的な機能や、発話相互に文脈を導入するテキスト形成的な機能だけではなく、参加者C・Dの関係をかたちづくる対人的な機能にかかわる要因が重要なはたらきをなしている。これは、時枝誠記のいわゆる「社会的機能」に対応する。ここで、機能は記述概念だとみなしているが、この機能は、さらに、意味論的に記述しなおされる必要がある。

(25)のCの発話の叙述表現には、「～のだ」の表現類型をもつものがあり、これがすぐれて対人的な機能をそなえている<sup>20)</sup>。1Cで設定した話題にたいして、7C・8Cは、この物語の下位の具体的な話題を導入するテキスト的な機能をはたしながら、Dにそれぞれの概念内容への方向づけをする対人的な機能がある。これに「のだ」の意味が機能しているのである。それは、この「夕顔のあんかけ」の物語に関して、あきらかにCのがわに知識量が優位にあることによっている。16Cの発話末の「の」もこれに等しい。

Dもこの表現類型をもちいている。それが18Dである。すでにのべたように、16Cまでの先行するテキストにあたえられていなかった情報をおぎなうための発話であり、要求表現としての対人的な機能をしている。18Dの概念内容は、16Cまでの先行テキストからDが産出した意味、「あんかけが全部だめになった」であり、これが先行テキストとの関係において整合しているかどうかの情報を、Cに要求しているのである。これは、Dがテキストの部分に言及する観察者としてCに関係していることを意味する。

これらは、「～のだ」の表現類型が、それを叙述表現にもつ発話と近傍の発話とを関係づけ、この発話の集合を統括することによる。

20D以下の、物語の結果と評価に関係する部分は、物語から生成される、参加者の態度や感情的なかわりに言及するという点において、C・Dともに物語の観察者として関係している。この部分には、同意要求に機能する発話が、20D・21C・23C・24Dのように連続しており、1C～19Cの部分とことなる。また、「大変だ」「悲しい」「嬉しい」「楽しい」などの感情にかかわる形容詞句がみえる。この評価は、物語を提示したCだけではなく、その受け手のDによってもなされており、コミュニケーションの参加者が相互にテキストから意味を産出する過程で、テキストの観察者として関係しあっており、この点においてCとDとはシステムを形成しているといえるのである。

(25)がテキストとして組織化される過程は以上のものであり、この過程で、コミュニケーションの参加者はテキストの意味論的な構成要素に言及し、観察者としてコミュニケーションに関係する。これは、発話の対人的な機能と、テキストから意味論的に選択される、参加者の態度や感情的なかわりかたへの言及によって規定される。このように、相互関係と意味論的な選択の背後に想定される、選択可能な要素の集合がシステムであり、その要素のもたらす関係の種別が機能である。テキストはその関係の集合として組織化されているのである。

以上のように、言語過程説で提示されていた諸範疇を、システムの構成要素として批判的に再構成することによって、より一般性のたかい方向性をしめすことができるのである。

## 注

- 1) ここまでの詳しい議論は、野村 (1996) を参照。
- 2) この考え方については、Halliday (1978 Ch. 2, Ch. 10, 1994 Ch. 1) を参照。
- 3) 伝達あるいはコミュニケーションをかんがえるときに「受け渡し」といった比喻によること自体にすでに問題がある。このことについては Luhmann (1984 K4-II) を参照。
- 4) Luhmann (1984: 193ff) など、彼は'Mitteilung'と'Kommunikation'とを別の範疇としている。なお、Luhmann (1990a: 3) では'Mitteilung'に'utterance'という語句をあてながら、それが英語に翻訳できない語句だと注記している。
- 5) この点については、湊 (1987: 45) にも指摘がある。
- 6) 時枝 (1966) では「描写機能」に言及し、これが言語の表現ではなく「受容する読者の側の体験、教養に基づくもの」であり、言語の本質的機能ではないとしている。
- 7) 機能の問題をふくめひろく時枝の言語過程説を検討したものに根来 (1985, 1988) があるが、このようなモデルとしてはとらえておらず、また批判がなされていない。
- 8) このような点を意識した議論として、Halliday (1978: 54ff, 112, 1994: Ch. 2) を参照。
- 9) Luhmann (1984: 203, 1990b: 24) は、コミュニケーションが「情報、伝達、理解」という3つの選択の総合として理解されるものであり、またどのコミュニケーションもこの3つの構成要素を差異化したり総合したりする、とのべている。
- 10) 時枝の「観察的立場」と「主體的立場」にたいして、本稿とは別の側面から批判をくわえたものとして、三浦 (1977:183-211)、イ (1996: 第9章4) がある。
- 11) 本稿で使用される文字化の方法は以下のものであり、大略、Levinson (1983: Ch. 6) による。基本は、漢字・仮名まじり表記によるが、長音は「ー」を使用する。ただし不明瞭な部分は ( ) 内に記入する。笑いなどの非言語的な情報は { } 内に記入する。沈黙の秒数を0.5秒単位で ( ) 内に記入する。上昇調のイントネーションを?で記す。発話がかさなったばあい、以下の番号の発話が//の位置から開始される。なお、A・B、C・Dは大学3年生の女子で、それぞれ親しい友人関係にある。
- 12) 会話における修正については、Schegloff et al. (1977)、Levinson (1983: Ch. 6)、ザトラウスキー (1993: 20-21) を参照。
- 13) ここでの「観察者」の概念規定については、Maturana (1970, 1978) を参照。
- 14) これは、Luhmann (1990b: 85f, 1990c: 15f) の「第2階観察」という概念と関係するが、そのコミュニケーションのかんがえかたに直接依存した議論をここで展開しているわけではない。
- 15) Schmidt (1989) では、'TEXT'を物質的な項、'KOMMUNIKAT'をその結果を含む認知過程とするターミノロジーがもちいられている。
- 16) マルヤマ, M. (1963/1984) 参照。同論文は「前書き」と「追記」を加えた訳稿による。
- 17) 説明にかかわる範疇は、野村 (1993, 1994) を参照
- 18) 「ずく」をふくむ長野県松本市方言の俚言使用の調査として沖 (1995) がある。これによると、同方言のネイティブ、セミネイティブともに、「ずく」は、使用率はたかいが、共通語意識は低い語とされている。本稿(23)の、Cは長野県木曾郡出身、Dは石川県羽咋郡出身で、収録時 (1994年6月) にはともに大学3年生、新潟県在住である。

- 19) 物語の基本的なしくみについては, Labov (1972: Ch. 9), Thorndyke (1977), 実生活の経験の物語という範疇については, Fludernik (1996: Ch. 1, Ch. 2) を参照。
- 20) 「のだ」について, 詳細は, 野村 (1995) を参照。

### 参 考 文 献

- Fludernik, M. (1996) *Towards a 'Natural' Narratology*. London: Routledge.
- Halliday, M. A. K. (1978) *Language as Social Semiotic*. London: E. Arnold.
- Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar* (second edition). London: E. Arnold.
- Labov, W. (1972) *Language in the Inner City*. Oxford: Basil Blackwell.
- イ・ヨンスク (1996) 『「国語」という思想——近代日本の言語認識』岩波書店
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge U. P. (1990, 安井・奥田訳『英語語用論』研究社出版)
- Luhmann, N. (1984) *Soziale Systeme*. Frankfurt: Suhrkamp. (1993, 1995, 佐藤勉監訳『社会システム理論』上・下, 恒星社厚生閣)
- Luhmann, N. (1990a) *Essays on Self-Reference*. New York: Columbia U. P.
- Luhmann, N. (1990b) *Die Wissenschaft der Gesellschaft*. Frankfurt: Suhrkamp.
- Luhmann, N. (1990c) *Soziologische Aufklärung 5*. Opladen: Westdeutscher Verlag.
- マルヤマ, M. (1963/1984) 「セカンド・サイバネティクス——逸脱増幅相互因果過程」『現代思想』12-14
- Maturana, H. R. (1970) “Biology of Cognition,” in Maturana, H. R. and Varela, F. J. (1980) *Autopoiesis and Cognition*. Dordrecht: D. Reidel:1-58. (1991, 河本英夫訳『オートポイエーシス』国文社)
- Maturana, H. R. (1978) “Biology of Language: The Epistemology of Reality,” in Miller, G. A. and Lenneberg, E. eds, *Psychology and Biology of Language and Thought*. New York: Academic Press: 27-63.
- 湊 吉正 (1987) 『国語教育新論』明治書院
- 三浦つとむ (1977) 『言語学と記号学』勁草書房
- 根来 司 (1985) 『時枝誠記研究 言語過程説』明治書院
- 根来 司 (1988) 『時枝誠記研究 国語教育』明治書院
- 野村真木夫 (1993) 「『説明』の機能——説明の表現の文脈効果」『表現研究』58
- 野村真木夫 (1994) 「日常的な会話における説明の表現——説明の文脈の組織化と相互作用における機能」『弘学大語文』20
- 野村真木夫 (1995) 「日常会話における『のだ』発話——テクスト的な機能と対人的な機能に関する問題提起」『表現研究』62
- 野村真木夫 (1996) 「日本語学の対象と方法 文章・文体」『日本語学』15-8
- 沖 裕子 (1995) 「『気づかれにくい方言』の隆盛と俚言使用の二相化」『言語』24-12
- Schegloff, E. A., Jefferson, G. and Sacks, H. (1977) “The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation,” *Language* 53-2:361-382.
- Schmidt, S. J. (1989) “On the construction of fiction and the invention of facts,” *Poetics* 18:

319-335.

ザトラウスキー・ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析——勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版

Thorndyke, P. W. (1977) "Cognitive Structures in Comprehension and Memory of Narrative Discourse," *Cognitive Psychology* 9: 77-110.

時枝誠記 (1941) 『国語学原論』岩波書店

時枝誠記 (1951) 「文学研究における言語学派の立場とその方法」『国語と国文学』28-4

時枝誠記 (1955) 『国語学原論 続篇』岩波書店

時枝誠記 (1956) 『現代の国語学』有精堂

時枝誠記 (1960) 『文章研究序説』山田書院 (明治書院復刊)

時枝誠記 (1966) 「言語・文章の描写機能と思考の表現」『国文学研究』34 (『文法・文章論』岩波書店再録)

van Dijk, T. A. (1972) *Some Aspects of Text Grammars*. The Hague: Mouton.

## Observo en Komunikado: De la Lingva Teorio de Tokieda al la Sistema Teorio

Makio NOMURA\*

### RESUMO

La celo de tiu ci artikolo estas kritiki la lingvan teorion de Tokieda, kaj rekonstrui kategoriojn "komunikado", "funkcio" kaj "observo" en framo de la sistema teorio. Mi uzi ĉiutagajn konversaciojn por analizaj ekzemploj. La esencaj punktoj estas sekvanta. Ni devas disigi koncepton "komunikado" de Tokieda en du konceptoj. Unu estas "transmisio", kiu prezentas tekston al partoprenanto. La alia estas "komunikado", kiu enhavas procezon de senca produktado. Tokieda neglektis spertan adekvatecon, unikecon kaj decideblecon, kiam li konceptis funkciojn. Sed ni devas reguli funkciajn kategoriojn kiel priskriba koncepto de teksto kaj komunikado. Tokieda difinis observon ekster komunikada sistemo. Kontraŭe mi difinas tion en komunikada sistemo, kaj proponas ke partoprenantoj kaj observantoj estas interrilata en la sistemo.

---

\* Division of Languages: Department of Japanese Language